

## 「集合を考察する第二十章」

時の本性が欠如すると示す>時が本性として有る理由を否定する>時は果が起こる俱有縁であることを否定する>

[章の著述を説く]

ここに言う。「時はまさしく有る。(何故ならば) 果が起こることに対して俱有縁<sup>1</sup>である故である。無いものは俱有の(一緒に為す) 本質ではない。石女の子の如くである。それ故に、時とは有るのみである。(何故ならば) 俱有縁である故である。

ここで、『種子と土と水と火と風と虚空と時』という因と縁の集合に依拠して生じるものである芽は、種子等の因や縁の集合が有るとしても、時の特性が近くないので生じないのである。

外界において見られる如く、内の我性においても同様であり、世尊が

『身体を持つ者達の諸業は、百劫の間にも無駄にならない。集まり時が来れば、まさしく果として熟すとなる。』

と斯くも説かれた如くである。何故ならば、そのように、その時に相互関係が有る故に、芽等が起こることに対して俱有(一緒に為す) 縁となる『時』というものは有るのである。」

章の著述を説く>因縁の集合より生じることを否定する>以前の集合より生じることを否定する>集合より直接生じることを否定する> [集合における有・無が生じることを否定する]

述べよう。もし、芽等まさしく起こる果が有るならば、時は俱有因そのものとなるものであるが、有るのではない。如何様にといえば、ここで、種子等、因や縁の集合より芽等の果が生じると考えれば、集合に留まる様相の果か? 留まらないものがそれより生じると考えるのか?

「それでどうなる」といえば。

「もし、様相として留まるものを考えるならば、それは適わない。」と示す為に、

もし、諸々の因と縁の、  
集合そのものより生じるとなり、  
集合に果が有るならば、  
如何様に集合そのものより生じようか。 1

<sup>1</sup> 俱有縁：結果の質的な原因と共にある条件。

「因縁」という時、「因」は結果の質的な原因。「縁」はその「因」を助ける条件。

と説かれ、もし、因と縁の集合に果が有るならば、そう見れば、集合に有るものが、如何様にそれによって生じさせられるとなろうか。銅盆に有るヨーグルトは、銅盆によって生じさせられるのではない。

他にも、有るものは既に成立している故に、既に成立した壺が目前に留まるように、再度生じることに依ることは無いのである。

もし、「顕現させるか、粗くするのである。」といえは。

そうではなく、この説には以前に既に返答した故であり、

「火は他より来ず、木にも、火は有るのではない。その如く、」<sup>2</sup>  
 という部分で、既に答えを述べた。

『何？集合に果は無い。』と考えれば。

「それも不合理である。」と示す為に、

もし、諸々の因と縁の、  
 集合そのものより生じるとなり、  
 集合に果が無ければ、  
 如何様に集合そのものより生じようか。 2

と説かれ、もし諸々の因と縁の集合にその果が無ければ、ならば如何様に因と縁が集まることによって果が生じさせられようか。(何故ならば)そこに有るのではない故に、砂より胡麻油の如くである。まさしくそれ故にあり得ないので、

「集合に果が無ければ、如何様に集合そのものより生じようか。」  
 と説かれ、『その果は集合そのものよりまさしく生じない。』と考察された。

集合より直接生じることを否定する > [集合において有無そのものを否定する]

他にも、

もし、諸々の因と縁の、  
 集合に果が有るならば、  
 集合に認められる対象として有るべきであるが、  
 集合そのものに認められる対象として無い。 3

<sup>2</sup> 「火は…その如く、」:『根本中論』第 10 章 13 偈。

そこに有るものは、そこに認識されるものとして有る。例えば銅盆のヨーグルトの如くであるが、そこに有るのではないものは、そこに認識されるものとして有るのではない。例えば砂に穀物油のように。

「何？諸事物は有るけれども、非常に微細や、非常に近いや、非常に遠いや、根（感覚器官）に攪乱があったり、根（感覚器官）を傷つけたり、具身者の道具によって断たれたり、身体が現れなくなったり、心意に捉えられていない故に、極微や、目にある眼薬の匙や、太陽の進行や、眼障を持つ者にとっての一本一本の髪や、盲目者と聾者等にとっての色形と音声や、壁等によって遮断された壺や、成就者や天や尋香等の身体や、思い描かれた他の土地のように、認識される対象として無いのである。」といえは。

ならば、何かによってこれらが有りながら認識されないとなる、これらの認識されていないものがまさしく有ることに、どんな理由が有るのか。

「比量<sup>3</sup>や、譬喩<sup>4</sup>や、諸々の経証<sup>5</sup>が保持する故に、それらは有るのみである。」といえは。

ならば「それらは認識されていない。」と述べるものではない。(何故ならば)比量等が認識する故である。

もし、「形ある根（感覚器官）によって捉えられる対象であるものは有るが、それらの行為するものによって捉えられていないのである。」といえは。

述べる。何？我々が、「存在しつつあるものは形ある根（感覚器官）によって捉えられるものとして無い。」という言葉で言ったか？ならば何かといえは、我々は

「集合に認識対象として有るべきであるが、」  
と一般的に言うのだ。

<sup>3</sup> 比量：理由を考察することによって了解する正しい知覚/概念作用。「生じたもの」という理由から、音声が無常であると了解する思考等。

<sup>4</sup> 譬喩：譬喩量。類推。ここにいる動物は「牛」と呼ばれ、あちらにいる動物もこれに似ているので「牛」であると了解する思考等。

<sup>5</sup> 諸々の経証：聖教量しやうぎやうりやうにあたる。信じ得る何者かが説かれた言葉と、それによって正しく知る知覚/概念作用。経典の言葉「○○。」と、それによって○○であると了解する思考等。

仮にまた、『それに無いものは、それより生じるのではなく、砂より穀物油の如くである。果は集合より生じるのでもあり、それ故に、集合に果がまさしく有ることは比量より（知るの）である。』と思えば。

述べる。「それに有るものは、それより生じるのではなく、例えば銅盆よりヨーグルトは生じないが如くである。」というこの比量より、「それが有るとは正しくない故に、集合において果はまさしく無い。」と何故捉えないのか。

仮にまた、『双方とも比量に反する故に、まさしく有ることは正しくないが如く、まさしく無いことも正しくはない。』と思えば。

述べよう。我々は、これが無いと論証するのではない。ならば何かといえば、他派がまさしく有ると尽く考察したこれを否定するのである。その如く、我々はこれがまさしく有ると論証するのではなく、ならば何かといえば、他派がまさしく無いと考察したこれを排除するのである。（何故ならば）二極辺を斥けて中の道を成立させようと欲す故である。

『四百論』よりも、

「まさしく有る果を誰かが主張し、まさしく無い果を誰かが主張するが、家屋の為には、柱等の、飾りは意味が無いとなる。」<sup>6</sup>

と説かれた。

それ故に、そのようであれば「集合より果が生じるのではない。（何故ならば）有るものは認識対象として有るという背理となる故である。」と論立されるのである。

『何？集合に果はまさしく無いのである。』と思えば。

そう見るとしても、

もし、諸々の因と縁の、  
集合に果が無ければ、  
諸因や諸縁も、  
因縁でないと等しくなる。 4

斯くも火や炭に芽が無い故に、それらがその因にはならないように、述べよ

<sup>6</sup> 「果は…となる。」：『四百論』第 11 章 15 偈。

うとする種子等も因縁そのものにはならない。(何故ならば) それらに芽は無い故である。

因や縁ではないものより、果が起こることは正しくもなく、それ故に、果が起こることは無い。

以前の集合より生じることを否定する > [集合より間接的に生じることを否定する]

ここで言う。「何かより『集合より果が有るのか?あるいは無いのか?』と、こう思われる集合には、果が生じさせられる能力は無い。ならば何かといえば、因に果が生じさせられる能力は有るが、集合は因に役立つことのみをするのである。その因は、果が生じさせられる為に因を与えて滅すとなるが、その因が役立った果も生じるのである。」

述べよう。生じていない果の因には、役立つことが有るのではないが、生じていないものに対しては、石女の子に対するように、誰によっても僅かにも行為することができないので、この考えは正しくない。

他にも、

もし、因が果に、  
因を与えて滅すとなれば、  
与えた分と滅した分の、  
因の我性は二つとなる。 5

もし、『その因が果を生じさせる為に、その因は能作因を与えて滅すとなる。』と考えるならば、そう見れば、与えた分と滅した分のその因の我性は二つとなるけれど、それは正理でもない。(何故ならば) 半分恒常である背理となる故と、半分無常となる故である。互いに相反する恒常と無常も、単一に無い故である。

もし、因の我性が二つである背理を斥ける為に、果を生じさせる為に僅かにも与えずに一切の我性が滅すと主張するならば。

そう見るとしても、

もし、因が果に、  
因を与えずに滅すとなれば、  
因が滅してから生じた

その果は無因となる。 6

もし、因に僅かにも与えておらず一切の我性として因が滅したならば、そのように因が滅してから生じたその果であるものは、無因であるのみとなるが、無因は有るのではないので、この考察は正しくない。

因縁の集合より生じることを否定する > [同一時の集合より生じることを否定する]

ここで言う。「もし、果が因より生じたことによってこの過失となるならば、そのようであれば、集合と一緒に生じたもののみが、果を生じさせるものとなり、例えば灯明は光の生じさせるもの（因）であるが如くである。」

「この考察も合理ではない。」と示す為に、

もし、集合と一緒に、  
果も生じるとなるならば、  
生じさせるものと生じさせられるものが、  
同時である背理となる。 7

と説かれ、黄牛の、同一時にある左右の角は、まさしく生じさせられるものと生じさせるものとも見られないので、これは正しくない。

因縁の集合より生じることを否定する > [後時の集合より生じることを否定する]

ここである者が、「諸事物は起こっていないものより生じることは無い。（何故ならば）突然である背理となる故である。それ故に、その果は因縁の集合の前時点では、未来である時点に留まるのであるが、因縁の集合によって、それは現在時点に生じさせられるのである。しかし、実質はまさしく留まる。」という。

それらに述べることは、

もし、集合の以前に、  
果が生じたとなれば、  
諸々の因と縁の無い  
無因の果が起こるとなる。 8

といい、もし集合の以前に果が自らの本質として有るとなれば、それは因と縁に相互関係が無いとなるが、それ故に因無くして起こるとなるけれど、因無く

して起こる事物はまさしく有るのでもない。(何故ならば) ロバの角等も存在する背理となる故である。以前に既に成立したものについても、因と縁に相互関係することによる必要性(目的)が無い故にも、これは正理ではない。

章の著述を説く > 因そのものより生じることを否定する > [因果は同一本質であるという説を否定する]

また他の者は、「果とは因のみが生じさせるが、集合によってではない。しかし既に説かれた過失である背理ともならない。このように、誰かより『因が果に因を与えて滅すとなるのか?あるいは与えておらずに(滅すとなるの)か?』と尽く分析することになる、因も他であるが果も他であるのではない。しかしながら因そのものが滅して果の我性として尽く留まるのである。」という。

そう見るとしても、

もし、因が滅して、果に  
因が全く移行するとなれば、  
以前に生じた因も、  
再び生じる背理となる。 9

『もし、因が滅したならば果が生じるが、その果も因の我性を持つもののみである。』と考えれば、そう見るのであれば、因は全てにおいて移行するとなる。踊り子が他の衣装を外して他の衣装を受け取るように、因が移行したのみのものとなるけれど、以前に無い果が生じるのではない。それ故に、因はまさしく恒常であるとなるが、恒常の諸物はまさしく有るのでもない。

斯くも『四百論』より、

「何かは、何処かで、いつ時も、依拠しておらずまさしく有ることは無い。然れば、いつ時も何処かにも、恒常は何も有るのではない。」<sup>7</sup>

と説かれた。

他にもこの考察においては、以前に生じた因が再び生じるとなるが、生じたものが再度生じることは正理ではない。(何故ならば) 必要性が無い故と、無限である背理となる故である。

『何を。或る我性として有るその我性が生じるのではない。或る我性として有るのではないもののみが生じるのだ。』と思えば。

これも適さない。(何故ならば) 因自体の本質である因の本性を捨て去っていないものを「果である。」といい、名前だけのものが別である故と、別の時点で

<sup>7</sup> 「何か…無い。」: 『四百論』第 9 章 2 偈。

あろうとも実質が不別であると論証できない故と、果の時点において因の本性を尽く捨て去ったものが、果という言葉で述べられる対象である故に、「因は果の我性として留まる。」というこれは凡々である。

困そのものより生じることを否定する>因果は別本質であるという説を否定する>因が、果が生じる行為を準備することを否定する> [滅した因と、留まる因が果を生じさせることを否定する]

他にも、もし因が果を生じさせるならば、それは滅したもののか、滅していない何れが生じさせるのか。果も生じたもののか、生じていない何れが生じさせられるのかと問えば。

「双方のようでも不合理である。」と示す為、

滅し消えたものが、  
生じた果を如何様に生じさせようか。  
果と関係する、  
留まる因も、如何様に生じさせようか。<sup>8</sup> 10

と説かれ、もし先ず、『滅し消え、失壊した因によって、生じた果一有り存在するものが生じさせられる。』と考えるならば、それは不合理である。何故かといえ、滅した、有るのではない因が如何様に果を生じさせるとなろうか。もし生じさせるならば、石女の子も子を産むとなるだろう。再度の生に相互関係が無い、有り存在する果も、因によって如何様に生じさせられるとなろうか。

仮にまた、『効力が無い故に、滅したものによっては生じさせられない。ならば何かといえ、留まる因のみによって果は生じさせられるだろう。』と思えば。

述べる。

「果と関係する、留まる因によっても、如何様に生じさせられようか。」

9

存在する果と関係する一正しく関係する、変化の無い本性を持つ、留まる因によっても、如何様に生じさせられるとなろうか。ここで、

「因は様相として変化すれば、他の因となり」<sup>10</sup>

<sup>8</sup> 生じさせようか。：デルゲ版の動詞は「因」が主語となる能動態となる。

北京版・ナルタン版では動詞が受動態「生じさせられようか。」となるので、主語は「果」であり、「因によって、如何様に生じさせられようか。」となる。

<sup>9</sup> 「果と…ようか。」：デルゲ版本文ママ。

<sup>10</sup> 「因は…なり、」：『四百論』第 9 章 9 偈前 2 行。



という、因の事物として了解されている因は、疑いなく様相として変化するものである必要があるが、様相として変化しないものは因の定義を具えるのではないので、果と関係することによって如何様に生じさせられようか。(何故ならば) 果はまさしく有る故である。

『あるいは、有る果も生じさせられることができない故に、果に関わり無く、正しい関係の無い因のみによって果は生じさせられるだろう。』と思えば。

「これも正理ではない。」と説かれたのは、

もし、因果が関係していなければ、  
如何なる果を生じさせようか。

といい、「もし因は果と関係していないと主張するならば、これは如何なる果を生じさせようか。関係していない故に、果である全てを生じさせるか、あるいは僅かにも生じさせるとはならない。(何故ならば) 関係が無い故である。」というお考えである。

因が、果が生じる行為を準備することを否定する> [因は、見て・見ておらずに果を生じさせることを否定する]

他にも、ここでもし因が果を生じさせるならば、「それがその果を見てか? 見ておらずに生じさせるのか?」と問えば。

「双方の如くとも適わない。」と説かれたのは、

因は、見ても見ておらずとも、  
果を生じさせることはしない。 11

という。そこでもし『見て生じさせる。』と考えれば、それは正しくない。何故ならば、有るもののみを見ることはできるが、有るものでないものは、そうではない。

「有るのだ。」といえは。

それは生じさせられるものではない。(何故ならば) 有る故である。そのようであれば、先ず、因が果を見て生じさせることはしない。

見ておらずとも生じさせることはしない。(何故ならば) まさしく一切の果の、

生じさせるもの（因）である背理となる故である。

「何？この『見る』はどう理解するものであるか。」といえよ。

述べよう。「見るとは認識することである。」というこれは、世間に公認されたものである。

もし、「根（感覚器官）が無いので、種子等においてこれはあり得ないのではないか。」といえよ。

あり得ようとあり得なくとも構わない—我々にとっては反論され考察される対象ではないが、「ならば誰にとって？」といえよ、その（実在として）生じると語る者達にとってである。

そこでもし、生じると語る者が「見て生じさせる。」といえよ。

『種子等が見た。』というこれは、世間において見られない。」と彼に述べたまえ。それ故にこの考察は正しくない。

『何？見ずに・・・』と考察するならば。

そう見るとしても、見られておらず、僅かに何か有るその一切を生じさせるとなれば、生じさせられるのでもない。それ故に、見ておらずとも生じさせるのではない。我々は、（他派が）主張しないことを論証したことによって他派の考察を否定するのであり、諸衆生はそれ以前に思し召しを放つ創造者を持つと承認する、士夫等を因であると語る者達や、種子等は同一の根（感覚器官）をもつと考える耆那教徒達においては、背理が翻ることはない。それ故に過失はない。

因果は別本質であるという説を否定する＞ [因が接して・接さずに果を生じさせることを否定する]

他にも、もし因と果に、互いに集合する定義をもつ接触が有るならば、その時、その二つは生じさせられるものと生じさせるものである事物となる。何故ならば、互いに接したことの無い、光と闇や、輪廻と涅槃においては生じさせられるものと生じさせるものである事物は見られない。それ故に、「因と果の二つは、生じさせられるものと生じさせるものの事物である」と主張するならば、他として接したことを疑い無く承認しなければならぬ。しかし、それも尽く

分析したならば、三時ともにおいても有るのではなく、これ故にも因によって果が生じさせられるのではない。

如何様に接したことが有るのではないかを示す為に、

過去となる果は、過去となる因と、  
生じていない因と、生じた因と、  
一緒に接したとなることは、  
いつ時にも有るのではない。 12

と説かれた。『先ず、過去となる果は過去となる因と、一緒に接したことはいつ時も一永劫に有るのではない。(何故ならば) 二つの時とも過去そのものであるので、有るのではない故である。

過去となる果は、生じていない因と接したことはいつ時も有るのではない。(何故ならば) まさしく「失壞した」と「生じていない」ことによって、二つとも有るのではない故と、時間が別である故である。

過去となる果はまた、現在となる生じた因とも接したことは有るのではない。(何故ならば) 時間が別である故と、失壞した果は、有るのではない故に、石女の子と祭祀の如くである。』というご考察である。

斯くもこの果が、過去と未来と現在である因と一緒に接したことはいつ時も有るのではないが如く、「現在となる果が、三時それぞれの因と一緒に接したことは有るのではない。」と示す為に、

生じた果は、生じていない因と、  
過去の因と、生じた因と、  
一緒に接したとなることは、  
いつ時にも有るのではない。 13

と説かれた。生じた果は、生じていない、あるいは過去である因と一緒に接したことは無い。(何故ならば) 時間が別である故である。現在となる果は、現在となる因とも一緒に接したことは有るのではない。(何故ならば) 因と果は同時に無い故と、既に有るものに接したことは無意味である故である。相互関係の無い存在において、再度接したことによって如何なる必要性があるか。それ故に、接触は無い。

ここで、如何様に未来となる果も、過去と未来と現在起こった因と一緒に接

したことは有るのではないかを示す為に、

生じていない果は、生じた因と、  
生じていない因と、過去の因と、  
一緒に接したとなることは、  
いつ時にも有るのではない。 14

と説かれ、生じていない果とは無であるが、それは別の時間と、現在と過去となる因と一緒に接したことは有るのではない。(何故ならば)時間が別である故である。

未来となる因とも一緒に接したことは有るのではない。(何故ならば)双方とも無い故である。

そのように、一切の様相において因果の二つの接触が有るのではない時、

接したことが有るのでなければ、  
因によって果は、如何様に生じさせられようか。

『接したことが有るのではない故に、因によって果はまさしく生じさせられず、石女の子の如くである。』とのお考えである。

もしまた、『接したことはまさしく有るので、因によって果は生じさせられる。』と思えば。

それも正理ではない。(何故ならば)三時ともにおいても接したことが認められていない故である。

もしまた、因果の二つは何かのように接したと考えるならば。

そう見るとしても、

接したことが有るとしても、  
因によって果は、如何様に生じさせられようか。 15

といい、『一緒にある果が再び生じることは無意味である故と、一緒にない諸物においても、接したとは正理ではない故である。』というお考えである。

因が、果が生じる行為を準備することを否定する > [果が欠如する・欠如しない因が果を生じさせることを否定する]

他にも、

仮に果が欠如する因が、  
如何様に果を生じさせようか。  
仮に果が欠如しない因が、  
如何様に果を生じさせようか。 16

因であり、果を生じさせるものであると主張されるものは、それ（果）が欠如するものか、欠如しないものが果を生じさせるのか？と問われる。

そこで、果が欠如し離れた因が、果を生じさせることはしない。（何故ならば）因でないもののように果が欠如する故である。

果が欠如しない因によっても、果を生じさせることはしない。（何故ならば）有る故に、息子のある祭司の如くである。そのようであれば、先ず果が欠如するか、欠如しない因が果を生じさせるのではない。

因が、果が生じる行為を準備することを否定する > [空・不空である果を因が生じさせることを否定する]

果であるものが生じることも、空でないものか、空であるものが生じさせられるのか？と問われる。そこで、

空でない果は、生じるとならない。  
空でないものは滅すとならない。  
空でないそれは、滅しておらず、  
生じていないともなるのだ。 17

空でない果は、縁起として起こっておらず、本性として尽く留まるのであるが、そのような尽く留まる果は生じるとならず、本性に退転することが無いので、滅すとならない。それ故に、それを空でないと主張するならば不生不滅となるけれど、そのように主張するのではない。それ故に、その果は不空ではない。（何故ならば）生じ、滅すと承認した故である。

ここで、「空である果も有るのではない。（何故ならば）生と滅がまさしく無い背理となる故である。」と示す為に、

空が如何様に生じるとなり、  
空が如何様に滅すとなろうか。  
その空も、滅しておらず、

生じていない背理ともなる。 18

と説かれ、そこで空とは、本性として無いものを述べるが、本性として無いものが、如何様に生じるか、滅すとなろうか。本性として無い虚空等には、生、あるいは壊は見られない。それ故に、その果は空であると主張しても、生じておらず、滅していない背理となるだろう。

因が、果が生じる行為を準備することを否定する > [同一本性と別本性の因が果を生じさせることを否定する]

他にも、「もし因であるものが果を生じさせるならば、それは果より別か、別のものによって生じさせられるのか?と問えば、双方の如くとも不合理である。」と説かれたのは、

因と果がまさしく同一であるとは、  
いつ時も合理とはならない。  
因と果がまさしく他であるとは、  
いつ時も合理とはならない。 19

という。これは主張命題のみであり、

「如何様に証明されたか」といえば。

(それを) 示す為に、

因と果がまさしく同一であれば、  
生じさせられるものと生じさせるものが、同一となる。  
因と果がまさしく他であれば、  
因と因でないものが等しくなる。 20

と説かれ、もし因と果がまさしく同一であるならば、その時、生じさせられるものと生じさせるものの二つはまさしく同一であると承認されたとなるが、その二つはまさしく同一でもない。(何故ならば) 父と子や、眼と眼識も同一である背理となる故である。そのようであれば、先ず、因と果において同一性は有るのではない。

ここで、まさしく他であることも有るのではない。何故かといえば、もし因と果がまさしく他であるならば、その時、他には相互関係が無い故に、果は因に相互関係がまさしく無いとなるけれど、それはそのようでもない。それ故に、

因と果において他性も有るのではない。

それらをそのように尽く分析したならば、それ（自）そのものと、他そのものが有るのではないそれらは、いつ時も生じさせられる事物と、生じさせる事物ではない。それ故に、因によって果は生じさせられるのではない。

因が、果が生じる行為を準備することを否定する>

[自性として有る・自性として無い果を因が生じさせることを否定する]

他にも、「もし因が果を生じさせるならば、それによって自性として有る果か、（自性として）無い果が生じさせられるのか。その何れとなろうか？」といえ

ば。

「双方の如くとも正理ではない。」と説かれたのは、

果が自性として有るならば、  
因によって何が生じさせられるとなろうか。  
果が自性として無ければ、  
因によって何が生じさせられるとなろうか。<sup>11</sup> 21

という。そこで、自性として有る、本性として存在する果であるものは、再度生じない。（何故ならば）有る故に。有る壺の如くである。自性として無いものである果も、因によって生じさせられるのではない。（何故ならば）自性として有るのではない故に。ロバの角の如くである。

もし、「影像によって、（理由が）まさしく確定しない。」といえ、まさしく不確定とはなろう。諸事物は本性が無いとは成立する。それ故に、本性を語ることを手放すとなり、我々の説の後続説者そのものとなるだろう。本性と共にある事物は何ものも無いので、相反するものは無い故に、本性が無い事物も無く、それ故に、不確定そのものであると何処でなろうか。

このように、我々のようであれば、影像は本性と共にあるのではなく、本性が無いのでもない。（何故ならば）主体が無ければ、その性質も無い故である。聖者方は、「影像」という僅かなものを、本性と無本性としてご覧になるのではない。

そこで前述で、

<sup>11</sup> 果が…なろうか。：『根本中論』デルゲ版では「果が自性として有るならば、因が何を生じさせるとなろうか。果が自性として無ければ、因が何を生じさせるとなろうか。」

「空でない果は、生じるとならない。」<sup>12</sup>

等の二偈によって直接、果が生じる行為の行為者そのものであることを否定したのであるが、今は「因は、果が生じる行為の準備の行為者そのものであることを否定したのである。」というこれが、「前述とこれの違いである。」と知りたまえ。

因果は別本質であるという説を否定する > [因そのものが本性として有ることを否定する]

ここで言う。「もしまた、因は果が生じる行為をまさしく準備するものであることを否定はしたとしても、そう見るとしても先ず、因は本性として有るものであるが、果が無ければ、因の因性も成立しない。それ故に、果も有ることになる。」

述べよう。もし、これが生じさせるものでないながら、因そのものであるとなれば、因となったものである。しかし、

生じさせるものでなければ、  
因そのものは合理とはならない。

『仮に、そのように因の因性は有るのではないとしようが、そう見るとしても、果とは先ず有るのであるが、因が無いものにおいて果は正しくもないので、それ故に果が有るので、因も有るとなる。』と思えば。

述べよう。生じさせることをしないものに、因の因性が有るのではないと説く時、

因そのものに合理が有るのでなければ、  
果は何のものであるとなろうか。 22

それ故に、果も無い。

章の著述を説く > [因縁の集合より生じることを否定する他の正理を示す]

ここで言う。「因だけが、果が生じる行為の準備をするそのものではないが、ならば何かといえ、因と縁が集まることによって果を生じさせる。」といえ。

それは正理ではない。(何故ならば) 過失は既に述べた故である。

<sup>12</sup> 「空で…ならない。」:『根本中論』第 20 章 17 偈。



他にも、この因と縁の集合が、もし果を生じさせると考えるならば、仮に（自らの）我性がまさしく我を生じさせるものなのか？あるいはそうでないものであるのか？

もし『生じさせるものである。』と考えれば、それは適わない。（何故ならば）我である事物を得ていないものは、良く準備するそのものとして見られない故に、疑いなく集合が自らである事物を得なければならぬが、我の事物を得たものは、再度我性が生じさせられる為に、まさしく良く準備するものであるとは適さない。それ故に、集合が自らの我性を生じさせないが、「我性を生じさせないものが、如何様に果を生じさせることができようか。」と示す為に、

諸因と諸縁による、  
 集合であるそれが、  
 我が我性を生じさせなければ、  
 果を如何様に生じさせようか。 23  
 それ故に、集合が為したことは無い。

と説かれ、諸因と諸縁の集合であるものは、先ず、我が我性を生じさせない。（何故ならば）己自体（我性）に行為を為すことは矛盾する故と、己自体（我性）が生じること無意味である故である。何か先ず、己自体（我性）を生じさせないものが、果を如何様に生じさせようか。「己自身を生じさせることのできな石女の子が、子を生まれさせる。」とは、正しくない。そのように、集合も自らの我性を生じさせるものではなく、果が生じさせられることは正理ではなく、それ故に、集合が為した果は無い。

もしまた、『もし、集合が為した果が無ければ、そう見れば、ならば集合ではないものが為したものは有る。』と思えば。

述べる。

集合でないものが為した果ではない。

集合が為した果が有るのではない時、如何様に、非常に矛盾する、集合でないものが為したものが有ると何処でなろうか。集合でないものが為した果も、有るのではない。

『仮にまた、果は無いともしようが、そう見るとしても、先ず因と縁の集合

は有るのである。しかし果が無ければ、因と縁の集合もあり得るのでもなく、それ故に果も有るとなる。』と思えば。

述べよう。もし、果そのものが有るならば、因と縁の集合も有るとなろうが、斯くも説かれた正理によって果そのものが有るのではない時、

果が有るのでなければ、  
縁の集合が何処に有ろうか。 24

『果がまさしく無いのであれば、理由が無いので、縁の諸々の集合も有るのではない。』というご考察である。

時は果が起こる俱有縁であることを否定する > [了義の教証と合わせる]

『聖大遊戯経』よりも、

「唇と喉と口蓋に依拠して、舌が動かされることより文字の発音が起こるけれど、喉に依拠してではなく口蓋よりではない。それぞれにおいて文字（の音声）は認められない。その集合に依拠してその言葉は、心意に従って起こるのではあるが、意と言葉は現れず形は無く、内と外にも認められるものとして無い。賢者が、言葉の発音音声と旋律の、生と壊について尽く考察したならば、その時全ての言葉はこだまのようであり、同音で精髓が無いと見る。」

と説かれ、『聖優波離請問経』よりも、世尊が

「大変喜ばしいこの教えにおいては、『家庭人の印を捨て去り、出家をしたまえ。存在する最高の果となるだろう』と、慈悲者がそう示されもした。家庭人の印を捨て去り出家をしてより、一切の果を得ることになるけれど、法（現象）の諸本性について量ったならば、全ての果は無く、果を得ることも無い。しかしながら果を得て、(将来) 得ることにもなる。嗚呼！最勝の人である慈悲者の、王が非常に素晴らしい正理を説かれたと、彼らに強い畏敬の念が湧きおこる。」

と説かれた。その如く『聖般若波羅蜜経』よりも、

「コウシカよ。大鎧を着けたその菩薩大菩薩は、色形に留まることをするな。受にではなく、想にではない。諸行にではない。識に留まることをするな。預流果<sup>13</sup>にではない。一來果<sup>14</sup>にではない。不還果<sup>15</sup>にではな

<sup>13</sup> 預流果<sup>よるか</sup>：四果の一。声聞の第一の果。見所断（見道で捨て去るべきもの）を捨てて、静慮地（禪定）を得る障害になる欲界の荒い煩惱を捨て去るまでの声聞聖者の修行果。

い。阿羅漢<sup>16</sup>そのものの果にではない。独覚そのものにではない。清浄に完全な仏陀そのものに留まることをするな。」と説かれた。

時は果が起こる俱有縁であることを否定する＞ [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「集合を考察する」という第二十章の解説である。

## DECHEN 訳

- 
- 14 <sup>いちらいか</sup>一來果：四果の一。声聞の第二の果。見所断（見道で捨て去るべきもの）を捨てて、静慮地（禅定）を得る障害になる欲界の殆どの煩悩を捨て去り、来生に欲界の生を一度経過して阿羅漢果を得るだろう声聞聖者の修行果。
- 15 <sup>ふげんか</sup>不還果：四果の一。声聞の第三の果。見所断（見道で捨て去るべきもの）を捨てて、静慮地（禅定）を得る障害になる欲界の煩悩を捨て去り、来生に欲界の生を受けずに阿羅漢果を得るだろう声聞聖者の修行果。
- 16 <sup>あらかん</sup>阿羅漢：阿羅漢果。四果の一。声聞の第四の果。見所断・修所断（見道・修道で捨て去るべきもの）を捨て去り、解脱を得た声聞聖者の修行果。